慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ 『「曖昧な生きづらさ」と社会 : クレイム申し立ての社会学』書評論文リプライ
Sub Title	
Author	草柳, 千早(Kusayanagi, Chihaya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2005
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.10 (2005.) ,p.164- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『「曖昧な生きづらさ」と社会——クレイム申し立ての社会学』書評論文リプライ

草柳　千早

はじめに、小倉さんと編集委員会の皆さまにお礼を申し上げます。小倉さんには、拙い本書を丁寧に読んで下さり、明快な論点整理とご指摘をいただきました。大変ありがたく嬉しく思います。

さて、小倉さんは、本書について、二つの大きな問題を指摘している。第一に、そもそも「経験」をどう捉えるのか。第二に、研究者の位置性。いずれも、意義として挙げられた点と表裏の関係にある。しかも、二つの問題は不可分のものとして問われている。はたして、二つは不可分なのか否か。社会学において、一方の極には、充分に切り離せるとする立場がありえ、他方の極には不可分と考える立場があるだろう。どちらに寄るかで、その研究は異なる形をとるだろう。

上の問題に対し、小倉さん自身は次のように答えている。必要なのは、「研究対象の経験と研究者自身の経験との出会いのプロセスをも含めた（経験の過程としての）調査過程論を、社会過程として作品に刻み込んでいくような研究実践」であると。凝縮された短い文のなかで、二つの問題は一挙に答えられている。正直に言って、これには異論がない。しかしそれではリプライにならない。思うに、このような研究とは、まさに小倉さんが近年行ってきたことを、私には彷彿させる。その印象が当たっているかどうかはさておき、この答えを一つのとりうる道としたうえで、さらに問い続けることが可能であり必要であろう。答えは、一つの正解に収斂するようなものでなく、むしろさまざまな可能性の模索を通じていくつも立てられ互いに鍛え合っていくものであろう。

以下では、小倉さんの示された二つの対——「言説」と「経験」、「全体性」と「断片」——を手がかりに、別の答えの可能性について考えてみる。

「言説」でなく「経験」に定位している、と小倉さんは言う。確かに私は、社会問題研究においてクレイムとして流通する言説を通しては見えない過程に目を向けた。私たちは日常、誰のいかなる発言が正当な問題提起でありクレイムかということ自体が争われる過程、クレイムが認知されず無効化される過程をしばしば目の当たりにしているし、そうした過程に巻き込まれることもある。このことに目を向けるなら、社会問題の構築に寄与する言説なるものを対象とするだけでは隔靴掻痒というほかない。その過程に巻き込まれた人々の、クレイムという言

説へと必ずしも結実しないさまざまな思い、「問題経験」をいかに捉えるかが、私の関心の一つであった。

付け加えれば、クレイムが無効化される過程、問題経験が語られず、あるいは語られても聴き取られない過程とは、見方をかえれば、社会の変化、流動化を拒む力の作用が見出される過程である。その力の作用、反「問題」構成の力をつぶさに見ていくことが、私のもう一つの関心であった。「経験」をどう捉えるのか、という問いは、特に前者の関心にとって重要な問いである。

では、問題経験をどう捉えるか。それは必ずしも「前言語的」というわけではない、あるいはそう扱って扱えるようなものとして想定しているわけではない。一方では、本書にも書いたように、何かを問題として経験すること自体、それを経験可能にするのは、すでにある知識や語彙、他者との相互作用であろう、ということがある。これは、キツセらが当初より注意深く述べていることでもある。他方でまた、私たちが他者の経験に接近しようとするとき、非言語的な経験や表現の力を軽視するつもりはもちろんないが、頼りにするのはまず言葉である。ならば、社会問題言説よりも人々の経験に定位することは、かえって「言葉」とその周辺に一層繊細な注意を向けることになるであろう。

では、私たちは他者の言葉に、どのように「出会う」のであろうか。例えば、当事者の「語れない」経験に接近しようとするなら、「生の全体性」へのアプローチが必要ではないかと、小倉さんは述べている。「応答」と「触発」、「出会いのプロセス」といった言葉によって示唆されているのは、素直に考えてまずは、調査対象との対面的な文字通りの出会い、いわばインタビュー（inter-view）という方法であろう。それは、応答と触発という相互的な過程を共有することによって協同的に創出される。これは、一つの出会い方である。

だが、それだけではない。言葉、エクリチュールとしての言葉は、いまここの発信者を離れてどこへでも広がって行く。どこででも私たちはそれに出会うことができる。そうした言葉は、最初の発信者の意図を越えて、あるいはそれと関わりなく、私たちを触発し応答へと誘いうる。言うまでもなくそれが言葉というものである。私自身は、本書でも引いたような、社会運動団体で出会った人々の何気ない発言や、ほとんど手作りのような小さな媒体に掲載された短い投書や記事の数々からどれほど多くを学んだかしれない。

だがそれでは「全体性」に接近できず「断片的」ではないか、と言われるだろうか。むしろ「断片的」であることは、問題経験についての語りの帯びがちな性格の一つではないか、私にはそのように思えることさえある。ちなみに、私が出会ったそれらの言葉が、片隅の小さな媒体の小さな場に断片的に見出されてきたことにも相応の理由があろう。誰もがインターネットにおいて発信者としての力を行使しうる今であっても、権威ある媒体に発言のための機会と大きなスペースを与えられることは、それ自体大きな特権なのであるから。「重要な社会問題」でない（そう認められていない）ことにそのような特権がどうして与えられようか。言葉との出会いを媒介するメディア、場のあり方にも自明視できない序列がある。そのことは、言葉と

のいろいろな出会い方を通してほぼ否応なく感受される。こうしたことは、「経験」を捉えることとは少し外れてしまうが、私にとって、上に触れたもう一つの関心と関わっており見逃したくない点である。

小倉さんは、私が採り上げた経験の語りを「基本的には断片的なもの」として、それに対して、「生の全体性」へのアプローチが必要ではないかと述べているが、当事者への、その生の全体性を念頭におく接近がある一方で、断片をトピックに沿っててていねいに集めていく接近もありうるのではないだろうか。

問題経験をめぐる言葉はまた、他者の言葉との出会いについての言葉である。その意味でも、経験への接近は言葉への注意深い接近へと回帰する。例えば、本書でも触れた高橋りりすの「泣き寝入り」という一語をめぐる考察に私は大変触発されたが、高橋には「泣き寝入りした」と言われた経験があり、そんな彼女がこの言葉との出会いから明るみに出したのは、その暴力性であった。慣用されているこの言葉は、被害者の声にまともに対応しない周囲の責任を被害者に転嫁する。このように述べる彼女の考察は、この一語と彼女の出会いのみならず、この言葉を甘受してきた沢山の人々の語りえなかった違和感や屈辱の経験に言葉を与え、それを掬い上げていると私は思う。彼女が行ったのは、言ってみれば、誰もが自明としている言葉についての常識的な理解を停止し、その言葉が何を行っているかをあらためて浮かび上がらせることであった。この例は、たった一語であっても、それとの出会いに注意深く接することで見えてくることがらの幅と深さを教えてくれる。

いずれにしても、研究者の位置は問題となるであろう。言葉は無数に発せられ、しかもさまざまな解釈と理解に対して開かれている。特定の言葉、特定の語り、あるいは特定の人の特定の経験に関心を引き寄せられること自体、研究者自身の個人史、それまでの経験と結びついていないはずはなく、その解釈は、研究者の関心とその限界によって枠取られ導かれる。そもそもすでにミルズが述べているように、誰も「社会の外」にはいないのである。その意味では、研究者は自分自身を抜きにして対象についてのみ語ることはできない。ただし、それを自覚的に行うか否か、またその程度の差は大きい。

小倉さんは、自覚と省察、さらにその過程自体を「作品」に「刻み込んでいく」ことを求める。方向性に異議はない。研究対象のみならず、研究者の関心とそのよってきたるところをも研究調査過程のうちに位置づけること、そしてその経過を報告に入れること。しかしこうしたことは、これまでにも言われてきたし、またそれゆえにかともすると教科書的な文言とさえ感じられることもある。言うことは容易だが、実行は簡単ではない。特に、小倉さんの言う二つ目の、作品への刻み込みに関しては、問題は、行うか否かではなく（まったく行わないということはできず）、いかに行うか、ということになるだろう。つまり、程度とスタイル、その選択という問題である。「書き込む」ではなく「刻み込む」と表現する小倉さんの言葉の選択にも、ニュアンスとしてそうした幅が意識されているように感じられる。くっきりとはっきりと刻み込むやり方もあれば、微妙な力加減で薄く刻むというやり方もあるだろう。それは、自分

を曖昧にしておくための韜晦としてでなく、あくまで表現スタイルの選択として、ありうるのではないだろうか。

考えてみれば、その選択もまた、研究者自身の生き方や自己表現のありようと関わっている。ならば、なぜそしていかに私はある特定の時点で特定のスタイルを選択しているのか、ということもまた、小倉さんに言わせるなら、私自身の「生活史的文脈から問」い、作品に刻み込まれなければならない、のかもしれない。実のところ、表現スタイルの選択とは、私にとって本書でも触れたように、かなり関心ある問題である。自分の経験する問題について語ろうとする者の言葉、クレイムを申し立てようとする者の言葉は、聞き届けられるためのスタイル、あるいは波風を立てずに軽く聞き流されるためのスタイルなど、何らかのスタイルを採っている。スタイルはまさに語り手の位置性と関わっている。小倉さんの要請は、この研究関心のうちに、研究者自身の選択をも位置づけて見てはどうか、という思考の道筋を示してくれたことになる。

小倉さんが書評を通して提起しているのは、本書を越えて、社会学の研究実践のありよう、その過程と成果のあらわし方そのものへの問いかけである。ここではその一部について、小倉さんの問いに触発される形で考えてみたことを書いてきた。つまり問いに本当には答えていない。求められている応答は、どんな答えであれ、実践を通して模索し試行していくしかない種類のものである。

（くさやなぎ　ちはや　大妻女子大学社会情報学部）